氏名（本籍地）	橋本　智明
学 位 の 種 類	博　士（学術）
学 位 記 番 号	学術（情）博　第　215　号
学位授与年月日	平成２７年　９月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科（博士課程）人間社会情報科学専攻
学位論文題目	F.シューベルトの交響曲第1 番―初期交響曲におけるその独自性
論文審査委員	（主査）東北大学准教授　窪　俊一
	東北大学教授　堀田　龍也　東北大学教授　岩崎　祥一
	東北大学准教授　森田　直子　北海道教育大学准教授　小野　亮祐
	東北大学名誉教授　足立　美比古

論 文 内 容 の 要 旨

序章

本章では，研究背景，研究目的について述べている。シューベルトは，生時の評価や関心が主に彼のリートに基づいていたため，一般的に歌曲の作曲家だと言われる。しかし，本論はシューベルトの器楽作品の中でも特に交響曲を研究対象としている。理由は，交響曲がシューベルトにとって音楽上非常に重要なジャンルであったこと，そして交響曲は内輪で演奏された室内楽とは大きく異なり，公の演奏会で演奏されることが非常に多く，多くの人に聴いてもらうことができる規模壮大な器楽ジャンルであったことの 2 つからである。従来のシューベルト交響曲の研究は，後期交響曲（交響曲第 7 番《未完成》，交響曲第 8 番《ザ・グレート》）に関するものが圧倒的に多く，初期交響曲（交響曲第 1 番～第 6 番）の研究は非常に少ない。個人史的な研究では研究範囲が少しは広がってはいるものの，その研究はあまりにも少ない。そもそも，このような現状が交響曲史上の位置づけをかなり貧弱なものにしている。また, 初期交響曲についての記述が少ないことは研究不足の事実を物語っている。この不足を補うことなしに，交響曲の作曲家としてのシューベルトをより明確に記述することは困難であろう。その意味で，シューベルト研究において，初期交響曲研究はとりわけ重要な意味を持っている。このような背景から本論は，シューベルトの初期交響曲を研究対象として扱う。また，先行研究において，初期交響曲の中で最も若い頃に作曲された交響曲第 1 番がとりわけ出色であると述べられている。しかし，初期交響曲研究において，交響曲第 1 番と他の交響曲との比較検討が詳細かつ十分に行われているわけではない。そこで，本論は，初期交響曲の分析と比較を通して，交響曲第 1 番が持つ独自性について明らかにしようとするものである。

第 1 章　F. シューベルトの初期交響曲の分析

本章ではシューベルトの各交響曲の各楽章の構造に関して主題や調性など踏まえた分析を行って

いる。具体的には，第 1 節～第 6 節はシューベルトの初期交響曲の詳細な分析を行った節になっている。節のはじめに，作曲時期およびシューベルトの年齢，楽器編成，そして楽章構成を提示している。各楽章の分析については，どのような構成（楽節や小節配分等）になっているのか，主題はどのようなものであるのかなどを中心に譜例をもとに説明している。つまり，本章は第 2 章，第 3 章で行う異なる 2 つの視点，つまり交響曲第 1～6 番の各交響曲における第 1～4 楽章のつながりの視点と楽章単位の視点からの比較をするための準備段階という位置づけである。

先行研究において，シューベルトの初期交響曲がハイドン，モーツァルト，ベートーヴェンの影響を受けていることは言われているが，本論の分析からも，これらの作曲家の影響を受けていることが推測できる。例えば，交響曲第 1 番第 1 楽章の第 2 主題がベートーヴェンの交響曲第 3 番の主題，あるいはピアノソナタ Op.13《悲愴》の第 1 楽章の第 2 主題と似ていることが指摘できるし，他にも交響曲第 5 番第 3 楽章では，モーツァルトの交響曲第 40 番の第 3 楽章と楽器編成や調性などが似ていることなどが挙げられる。つまり，シューベルトの初期交響曲において，ハイドン，モーツァルト，ベートーヴェンの作品が基盤にあるということが分析によって再確認できている。

このヴィーン古典派の伝統という基盤の上でシューベルトは交響曲第1番にどのような独自な表現を用いたのだろうか。それを明らかにすべく，次章ではシューベルトの各初期交響曲の第 1～4 楽章の関係について比較を行っていく。

第 2 章　第 1 ～ 4 楽章のつながりから見た比較

本章では，前章での分析を踏まえた上で，シューベルトの交響曲第 1 番から第 6 番までの各交響曲の第 1 楽章から第 4 楽章のつながりから比較を行う。比較を行う視点はまず小節割合である。これは，交響曲 1 作品，つまり第 1 楽章から第 4 楽章の中での各楽章の小節の割合を求め，更にその割合をグラフ化することによって構造上の違いを視覚的にわかりやすくし，比較を行う。

次に調性を取りあげ，それぞれの楽章の主調について比較を行う。第 1 楽章から第 4 楽章の各章の調性というものは，第 1 楽章，第 3 楽章，第 4 楽章が同じ調であり，第 2 楽章が別の調であるのがある程度一般化されていたといえる。例えば，ハイドンの交響曲第 100 番から 104 番，モーツァルトの交響曲第 39 から第 41 番，そしてベートーヴェンの交響曲第 1 番から第 4 番，および交響曲第 8 番などが挙げられる。このある程度一般化された調性関連を踏まえた上で比較を行う。

最後に，楽章どうしの主題の関連について比較を行う。ここでは，各楽章の主題を比較することによって，その主題の関連を明らかにする。例えば，第 1 楽章の第 1 主題が第 2～4 楽章の主題と比較し，動機や音型などの類似点を明らかにする。

それぞれの比較の結果，交響曲第 1 番にのみ見られる独自な部分というものが示された。まず，小節割合に関しては，交響曲第 1 番に注目した場合，とりわけ独自な部分は見みられない。最後に主題の関連についてであるが，まず交響曲第 3 番と第 5 番は，はっきりとした形での主題の関連は示すことはできなかった。しかし，他の作品についてはそれぞれに楽章を越えた主題の関連が見られた。交響曲第1番のみ第1楽章の第2主題が楽章間の主題との関連を強めていることがわかった。とりわけ，全ての楽章に関連付けていることは，楽章間の主題関係をより強めていることになる。また，交響曲第 1 番の第 1 楽章の第 2 主題の後楽節と第 4 楽章の第 2 主題の後楽節は，ほぼ音型が同じであり，強い関連があることがわかっている。つまり，これは交響曲第 1 番の独自な部分である。

第 3 章　楽章ごとの比較

本章では，第 1 楽章から第 4 楽章のつながりとは異なる視点，つまり各楽章どうしの比較を行っている。これは，交響曲の形式がある程度楽章ごとに決まっているからである。とりわけ，第 1 楽章と第 4 楽章は，ソナタ形式が基本構造となっている。第 1 節から第 4 節は，それぞれの楽章の形式の変形の有無，形式内の主題の形成・変化，楽節構造調性の変化などを中心に比較を行う。各楽章の比較の結果，ここでも初期交響曲において，交響曲第 1 番にのみ見られる独自な部分が示された。

第 1 楽章では，再現部において導入部を取り入れていること，導入部の動機と提示部の第 1 主題との関連が強いこと，提示部のエピローグ部分の出だしにおいてずらしの技術を用いていること，展開部において，第 2 主題を頻繁に用いており，そのことから，第 2 主題が楽章内での中心となる主題となっていることであった。

第 2 楽章では，A，B という部分だけではなく，C の部分が登場する，ロンド形式の変形を用いているのが交響曲第 1 番のみであること。そして，比較する条件が揃わない中で，部分的ではあるが，始まりの部分の楽節構造について比較を行った結果，交響曲第 1 番のみ A の部分の楽節構造が，4＋4 という楽節構造ではなく，4＋3 という楽節構造であった。

第 3 楽章では，A－B－A（再現）の形式で見た場合，A部分の前半ではシュタインベックの「対称的な不均等性（symmetrische Unebenheit)」[i]が交響曲第 1 番のみに現れていた。また，B部分（トリオ部分）は，楽節構造において，奇数小節数の部分があり，半分以上の小節において，オーボエとフルートのみで旋律を奏でる部分が交響曲第 1 番のみ現れていた。

第 4 楽章では，大枠の構造で見た場合，交響曲第 1 番は他の交響曲よりもむしろ典型的なソナタ形式を示しており，独自性というものは見られなかった。それに対して，主題労作に関しては，交響曲第 1 番のみに見られるものがあった。それは，交響曲第 1 番のみ，楽章内で用いられる主題は第 2 主題が中心的な主題であり，更に第 1 主題や部分的な動機が用いられている。

終章

シューベルトの初期交響曲の形式や大枠の構造の部分は基本的に古典派の伝統，とりわけモーツァルトやベートーヴェンを大きく受け継いだものとなっている。この事実は，シューベルトの触れてきた音楽や楽曲分析とその比較の結果からも明らかである。しかし，この古典派の伝統を受け継いだ中にもシューベルトの新たな試みと呼べるものは見ることができる。

初期交響曲において，交響曲第 1 番はその出発点であり，後の交響曲第 2～第 6 番にはない，独自な部分を備えていた。本論の目的は，これまでのシューベルト研究の補完を行うと同時に，シューベルトの交響曲研究における新たな土台を築きあげようとするものであったが，本論において，これまで明確には述べられなかった，初期交響曲における交響曲第 1 番の独自なものが明らかとなり，独自性をもつことが示された。今後の研究課題は，比較する範囲を，初期交響曲から全交響曲へ，そして器楽全体へと広げていくことである。本論においても，部分的にではあるが他作曲家との比較を行っている。とりわけ，シューベルトの交響曲第 1 番第 1 楽章の第 2 主題が展開部において用いられている主題である点を比較すると，モーツァルトの《ポストホルンセレナーデ》及び交響曲第 40 番 g-moll は，第 1 主題と第 2 主題のうち，展開部において用いられているのは共に第 1 主題であった。また，ベートーヴェンの交響曲第 3 番《英雄》Es-dur の第 1 楽章の場合は，展開部において第 1 主題が中

心的な主題として用いられている。これらシューベルトが影響を受けたとされる作品を比較するとそこには他作曲家と差異がみられた。このことから，詳細な他作曲家との比較を行うこともまた今後の課題となる。

---

[i] Steinbeck,Wolfram. »Und über das Ganze eine Romantik ausgegossen« DIE SINFONIEN. In:*Schubert Handbuch.* Hrsg. von Dürr, W & Krause, A. Kassel: Bärenreiter; Stuttgart: Metzler 2007[2] (1999[1]) p.568.